三昧境

石川囲碁同好会　金本好正

「名人」川端康成著は、本因坊秀哉名人の引退碁を同氏が観戦し、名人が死亡後（昭和 15 年没）20 年近く経過して完成しました。

名人の引退碁は、木谷実七段（小説では大竹七段）との間で打たれました。持時間は 40 時間（当時の時間制は、棋戦によって 18 時間もありましたが多くは 10 時間余りでした）と時間制をあってないものにする時間で、名人の体調問題もあり昭和 13 年６月 26 日から同年 12 月４日と約半年かけて打たれるという想像を絶する超ロングランの戦いでした。

勝負は、木谷実七段の５目勝ちで幕を閉じ、名人の不敗神話も引退碁をもって消滅することに・・・・・・。ただ、当時にもコミ制度があれば・・・・・ということです。

「碁や将棋をやって、相手の性格が分かるものではない。対局を通して、相手の性格を見るなどということは、碁の精神から考えると、むしろ邪道だろう。・・・私などはそんな相手のことよりも、碁そのものの三昧境に没入してしまう」という名人の言葉が紹介されている。我々も三昧境とまでいかないまでも、集中力が高まり無心に囲碁を指せた時、勝率がよかった経験をお持ち方もいらっしゃるのでは。　話はそれますがテニスでもパッシングショットをするとき、邪心をもってショットするとミスする確率が多いが、無心のときは良く決まる。

早打ち碁で良くミスするのが悩みの小生としては、人生終盤の囲碁の楽しみ方として名人の言葉を噛みしめ三昧境とはいかないまでも無の心で指せるようになればと願っている。その為にも、名人引退碁の雰囲気を少しでも味わうべく引退後の棋譜をそろそろ並べてみようかな・・・と思っています。

（2022 年 10 月 1 日　八碁連だより 372 号の巻頭言）